



2023.5 海外視察報告会

台灣の言語

Austronesian-speaking Peoples
オーストロネシア語族について

都市調査会（GV 5期生） 谷井千絵

總統府の展示…

南島語系分布図

Distribution Map of Austronesian-speaking Peoples



總統府の展示（撮影：筆者）

Austronesian-speaking Peoples オーストロネシア語族について

- オーストロネシア語族（オーストロネシアごぞく）は、**台湾から東南アジア島嶼部、太平洋の島々、マダガスカルに広がる語族**である。アウストロネシア語族とも。日本語では南島語族とも訳される。
- 台湾原住民諸語が言語学的にもっとも古い形を保っているとされるが確実ではなく、台湾原住民諸語がフィリピンから起源したという主張もある。
- かつてはマレー・ポリネシア語族と呼ばれていたが、**台湾原住民諸語との類縁性が証明され**、オーストロネシア語族と呼ぶようになった

- 考古学的な証拠と併せて、オーストロネシア語族は、**台湾から、東南アジアから**フィリピン、インドネシア、マレー半島に南下し、西暦 5 世紀にインド洋を越えてマダガスカル島に達し、さらに東の太平洋の島々や**ニュージーランドへ拡散したとされる。**パプア・ニューギニアへの拡散は北側沿岸の低地へ限定された。
- パプア・ニューギニアの大部分（パプア諸語）とオーストラリアの原住民の言語（オーストラリア・アボリジニ諸語）は、オーストロネシア語族ではない。
- オーストロネシア語族は1000前後の言語から構成され、**西はマダガスカルから東はイースター島、南はニュージーランドから北は台湾まで**と非常に広く分布している。おそらく6000年ほど前に、オーストロネシア祖語から分岐を開始した。

- 「言語の系統が同じ」というのは、「同じひとつの言語から発達したことが科学的に証明できる」という意味。この共通の祖先にあたる言語を「祖語」という。太平洋で話されるオーストロネシア諸語も「オーストロネシア祖語」という共通の祖先から発達した。
- 同じ系統に属する言語には単語や文法構造などにある程度の見かけ上の類似性が存在したり、比較的近い地域で話されているという特徴は持ち得る。ただし、見かけが似ていても系統が近いことにはならないし、逆に、見かけが全然似ていなくても同じ系統に属する場合もある。
- 言語は話者なしには存在しないから、言語の分岐は話者の一部が社会的あるいは物理的な形で母集団から分かれた結果であると解釈でき、これに現在みられる言語の地理的分布を照らし合わせることで民族移動の経路を割り出すことができる。

中国から東南アジア、そして太平洋の島々へ

- オーストロネシア祖語を話す人々は、今から5000年前ごろに、**中国揚子江流域から台湾に渡ったと考えられている。**その後台湾各地に広がった人びとはやがて、フィリピンへと南下しインドネシアにいたった。
- このようにオーストロネシア祖語話者を祖先にもつ人々は、台湾を出発した後、東南アジア・ニューギニアでそれまで住んでいた人々と時には争い、時には融和しながら、**その先是太平洋上のまだ無人の島々へと広がっていった。**そして今から1500年前ごろまでにはほぼ、現在みられるような分布をみせるようになった。
- 16世紀にはじまる植民地時代と二つの世界大戦を経た現在、オーストロネシア諸語には英語やフランス語はもとより、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語、ドイツ語、日本語など、**旧宗主国の言語の影響がみられるものも多い。**

地域別状況：台湾

- オーストロネシア語族の祖形を残す台湾原住民（中国語では高山族、日本語では高砂族）諸部族の言語はアタヤル語（タイヤル語）群、ツオウ語群、パイワン語群に大別され、このうちパイワン語群に属するアミ語の話者が10万人前後と最も多く、その他の言語の話者は数千人以下である。
- 現代の台湾人は殆どが人口の対部分である原住民と混血されているが、中国語（主に北京語、台湾語）の影響が強く、**原住民言語は消滅する傾向がある**。しかし**近年原住民言語の語学教育が学校で行われている**。

日本経済新聞2023.2.8〈グローバルウォッチ〉 「台湾語、次世代につなぐ」

- 「台湾語（公用語である中国語とは語彙や発音が大きく異なる言語。）」の、学習熱が若い世代に広がりつつある。
- 公用語である中国語は、中華民国が中国本土の標準語をもとに普及させた言葉。（台灣華語とも呼ばれる。）
- 台湾語は、17～19世紀ごろ、福建省から台湾に渡った人が話した言葉がもと。原住民の言葉。「音楽的な響きがあり、感情表現が豊か」
- 親や祖父母の世代が話していた言葉が、このままでは消えてしまうという危機感
- 5～6年前から、台湾人意識が高まる⇒中国との緊張関係の高まり

- 台湾語は、日本統治時代には、日本語由来の語彙も加わり、独自の発展をした。
- 「ありがとう」：中国語「謝謝（シェシェ）」 台湾語「多謝（トーシヤー）」
- 戦後、国民党一党独裁政権のもと、中国語（台湾華語）が公用語（大陸との一体感を示した）
- 日本語、台湾語を含むその他の言語は使用が制限された。1980年代以降の民主化を経て撤廃されたが、過去の影響が残り、若い世代を中心に台湾語を話せない。全人口のうち台湾語話者は7割との調査結果があるが、簡単な会話にとどまる人も多い。国連教育科学文化機関（ユネスコ）の指標では、「消滅の危険がある」
- 2018年「国家言語発展法」成立 台湾語をはじめ台湾で使用される多様な言語を中国語と平等と位置付けた。
- 2022年8月からは、以前の小学校に続き、中学校でも台湾語などの言語の授業が必修化された。

地域別状況：太平洋（メラネシア系とポリネシア系）

- 太平洋のオーストロネシア語族（海洋系）はニューギニア北部沿岸地域の言語から派生した。**メラネシア系とポリネシア系に大別**され、前者から後者が派生した。メラネシア系は中部太平洋のソロモン諸島、ニューヘブリディーズ諸島（バヌアツ）、フィジーなどに分布し、ポリネシア系はアメリカ合衆国のハワイ諸島、チリのイースター島、サモア、トンガ、ニュージーランドに分布する。
- **ニュージーランドのポリネシア系原住民マオリ族の言語がオーストロネシア語族の南限**となる。

台灣に近い八重山諸島は・・・



「波照間島」の島名をめぐる論争

- 波照間島（はてるまじま）：日本最南端の有人島。面積12.73 km²、人口は482人（2021年3月末現在）
- 「波照間島」の島名の語源：漢字は当て字で、一般的には、「果てのうるま」
- 「うるま」とは、かつては「琉球」という意味であると解されていた。つまり「琉球の果ての島」という意味にとられていた。
- しかしその後、「うるま = 瑞瑚礁」だという解釈がとられるようになり、「はてるま」 = 「果てのさんごの島」という説が一般的に。[八重山出身の方言学者・宮良当壯](#)による。

- 「はてるま」の語源にはもうひとつ、有力な仮説が発表されている。「**インドネシア語系の言葉ではないか**」というもの。この説は**人類学者・金関丈夫**による（1954年4月14日、朝日新聞西部版に連載「琉球通信」のひとつとして覚え書き程度のものが掲載された）
- 当時、両氏による論争が繰り広げられる。
- **金関丈夫**の論旨に基づけば、「はてるま」は「沖合いの島」という意味を持つインドネシア系の言葉が語源にあるという。さらには、現在の琉球語の流通する以前、八重山に異なった系統の言語があった可能性があり、それが入れ替わる際に旧言語のイントネーションが残存し、その後は逆に琉球語の成立にも影響を与えたのではないか、との仮説も。
- 台湾東岸を経由してフィリピン、インドネシアの文化と八重山との接触があったことは確実であり、一部に見直しが必要ではあるものの**金関説**のほうに分があるのではないか。**民俗学者・谷川健一**は述べている。
- このインドネシア語語源説は、現在あまり知られていない…。

ご清聴ありがとうございました。

：出典・引用：

- ・總統府展示パネル
- ・菊澤律子（国立民族学博物館 先端人類科学研究部・准教授、総合研究大学院大学）著
さんぽ道（エッセイ集）「オーストロネシア諸語について」
<https://www.r.minpaku.ac.jp/ritsuko/japanese/essays/index.html>
- ・Wikipedia オーストロネシア語族、波照間島
- ・2023.2.8 日本経済新聞夕刊 「〈グローバルウォッチ〉 台湾語、次世代につなぐ」
- ・本田 創 「波照間島あれこれ」ホームページ 「はてるま」語源論争～もうひとつの語源」
<http://www.kt.rim.or.jp/~yami/hateruma/gogen.html>